

修学旅行に参加して

—万石浦ライオン隊の修学旅行付添スタッフの感想—

NPO 法人 教育支援グループ

Ed.ベンチャー



私たち大学生グループは、6月から約2か月間活動をしてきましたが、今回の修学旅行を通して、私が新たに知ることのできた子どもたちの側面はいくつもあります。それは、今までにないくらい長い連続した時間を共に過ごせたことに加えて、そのタイミングで、自分自身が子供たちに向かっていく姿勢を変えることができたためだと思います。万石浦の子どもたち、特に男の子は「おはよう」と言う代わりに、体当たりをします。「遊ぼう」という代わりに、ほっぺをつねってきます。そのことを頭では分かっているにもかかわらず、やっぱり「人に乱暴するのはいけないことだ」と思ってしまい、どういう風に返したらいいかわからず、ただ「やめて」と言っていました。でも、「おはよう」と言ったのに「やめて」と返すような人と仲良くはなれません。そのことに気づき、私は体当たりをされたら体当たりをし返し、ほっぺをつねられたらつねりかえしてみました。すると今までその子と私の間にあった、見えない壁のようなものが崩れたように感じました。何人かの子どもは私に名前を尋ね、一生懸命覚えてくれました。私の名前が覚えられていなかったのは、「君とは友だちにならないよ。」というサインだったのかもしれませんが。こうして子どもたちと同じ視線に立って迎えた修学旅行だったからこそ、子どもたちのさまざまな側面を発見できた気がします。大人でも疲れてしまうような富士山でのハイキングを、小さな体で最後までやり遂げた子、地図を読むのが得意で、動物園では案内役になってくれた子、自分の体験をおもしろい比喻を使って表現できる子など、子どもたち一人ひとりに対して自分にはかなわないようなすばらしい部分を見つけることができました。それから、短いけれど濃い時間を一緒に過ごす中で、子どもたちは集団としてまとまる力をさらに強めたのではないかと思います。一日目の後半は疲れて大泣きしていた低学年の子は、二日目はほとんど落ち着いて過ごしていたし、最年長の中学生の男の子は、子どもたちのリーダーとなり、年少の子どもを面倒をよく見ていました。またこのメンバーだけで長い時間を共に過ごしたことで、教室では浮かび上がってこなかった、あるいは避けてきた子どもたちの問題や弱い部分と、子ども自身と支援者が立ち向かうことになりました。そこでやっと私には、子どもたちとのこれからの関わり方が見えてきたような気がします。週に一回やってきて、一緒に遊んで、相談に乗ってくれるお兄さんお姉さんはいつかなくなってしまいます。でも私たちが教育者になり、子どもと一緒に過ごす中で、修学旅行の取り組みを通して見えてきた子どもたちのいいところや成長した部分、そして彼らが抱えている課題を、子どもたちが今後自立して生きていくための力にできたら、これから先、近くにはいられなくてもあの子どもたちの支えになれるのではないかと感じました。 (今井美里 東京理科大学学生)

➤ の修学旅行では、万石浦中学校での普段の活動のときにはあまり見られない彼らが彼ら自身以外の人のことを真剣に考えている瞬間に多く出会いました。特に印象に残っていることが2つあります。

1つ目は、お土産を選んでいるときのことで。みんなお土産屋さんで長い時間真剣にお土産を選び買ったあとは満足そうに友達へのストラップや、家族へのお菓子を自慢げにみせてきました。中には、自分のほしいものをあきらめてみんなにお菓子を買う子

もいました。この子はサファリパークでの自由時間で別の子からカブトムシが500円で売っていると聞いてとてもほしがっていました。カブトムシの売っているところに行く前にお土産屋さんに行ったらほとんどのお菓子は700円以上し、彼の財布には1000円ちょっとしかありませんでした。そこで彼は「バスの中でみんなにお菓子あげてみんなで食べたいな」といって、カブトムシを買うか、お菓子を買うか10分くらい悩んだすえにお菓子を買いました。さらにその後カブトムシの売っている場所にいったら、メスが100円、飼育かごが200円でちょうど買える値段でした。しかし、彼はすこし考えたあと「やっぱやめた。君にジュース買う」と言ってカブトムシをあきらめました。その後ほかの子達と会い買ってもらうことはありませんでしたが、すごい衝撃をうけました。

もう1つは、花火についてです。修学旅行に行く準備として持っていくものを話し合う段階からずっと花火をやりたいと言っていた男の子がいました。その男の子は宿でも頻りに花火をやりたいと言っていました。少しいなくなったと思ったらもう1人の子とうれしそうに戻ってきて、「夜ごはんのあとに花火やるよ。でもみんなを驚かせたいから内緒にして」と言っていて、ばれないように部屋のカギをしめてみんなが安全に花火をできるように「7つの約束」を2人でにやにやしながら考えていました。

これらの子供たちの行動や言葉は、1カ月前の「自分はこれがしたい」「自分のためにこれをしてくれ」と自分のことだけを考えていた頃からは全く想像できませんでした。この変化は、子供たちが「集団」の中で生きる思いやりのある人間へと成長していることを感じさせてくれました。

また今回の旅行では、「自立」への重要なステップとしての大人の手を借りず自分たちの頭で考え工夫をしたり、行動している場面を見ることができました。避難所で生活していた彼らは、大人も大変だったからやり方を教えるのではなく、答えを教えたり、やってあげたりしてしまっていたことで「自分で考える」ということが少ないと感じていました。しかし、修学旅行では準備段階を含め、自分で考え行動することが増え着実に自立に向かっていくと感じています。彼らの言動の変化は今までやってきたことが間違っていなかったことを教えられ、これからのヒントを与えてくれた気がします。

(甘利悠貴 東京理科大学学生)

万石浦の子どもたちとの初めての出会いがこの修学旅行になりました。初めて会った時の子どもたちの印象は、元気で、明るく見えましたが、時間を過ごしていく内に違った面も見えてきました。一番感じたのはやはり、「叩く」行為や「悪口」を介して他者と関わろうとする子が多いということです。そうすることで、自分の存在をアピールして構ってもらおうとしているようでした。子どもたちの心にあるものを発散する場がなく、そのような形となって表れているように感じました。そしてその行為のほとんどが大人に向いていたことから、子どもたち同士のつながりもどこかぎこちないように感じました。また、我慢したり、ルールを守ったり、注意されたりといったことがこの数カ月はできない状況 だったのではないかと感じました。このような社会性を培う「学

校」が機能していなかったことや、教育になかなか手が回らなかった状況も原因の一つなのではないかと思えます。

富士山登山の時に5年生の男の子がずっと手をつないできました。「疲れているから」という理由でしたが、本当はこうやって甘えていたのではないかと感じました。その子は登山が終わると、そのような雰囲気は全くなくなり、友だちとまたふざけあっていました。

好きなスポーツがある中学生の男の子は、震災後家の手伝いで、そのスポーツに打ち込む時間がなくなったそうです。また、遊ぶ時間も減り、殆どが家の仕事の手伝いに変わったと話してくれました。普段当たり前のように過ごしてきた「子どもの時間」がなくなってしまったことは子どもたちにとって大きな影響であると思えます。

そんな状況下において、「子どもの時間」となったこの修学旅行の持つ意味は大きかったように思います。子どもたちは違う場所だからこそ、語ることができたこともあると思います。また、甘えたり、友だちと思いきり発散したりという場所にもなったのではないのでしょうか。そして、「自立」への一步になったのではないかと感じました。登山の先頭を歩いている時、夕食の挨拶の時、子どもたちの表情は違いました。どこか自信に溢れ、キリッとした表情にも見えました。子どもたちが持っている力を発揮できる舞台を作ることで、子どもたち自身が自分の足で立ち上がり、語り、歩きだせる「力」をどのようにつけていくかが今後の課題のような気がしました。そしてそれは、小学校の教員をしている私にとっては常に持っていなければならぬ課題だと思いました。

今回の修学旅行に参加して、子どもたちと触れ合うことで、この震災が及ぼした子どもたちへの影響の一部分と向き合った時に、自分の無力さを痛感しました。ただ、何ができるのか考えるだけでなく、実際に向き合い共に成長しながら考え悩むことが重要だと思います。被災地には、さらに大きな影響を受けた子どもも多くいることでしょう。教育者としてどのように向き合っていくのが私の課題です。

(下新原なつみ 大野原小学校教諭)

彼らとどのように接したら良いのだろうか？

この思いが今回、修学旅行に私が参加することが決まって考えた事前学習であり私の課題として位置付けた内容だ。修学旅行で接することになるであろう子供たちが体験した3・11の震災、津波の恐怖、震災後の生活、心へのダメージ、バックグラウンド・・・などを事前に考えようにも私の少ない人生経験の内にそれと同等ないしは似通ったものの経験があるわけでもなく、インターネットや雑誌、本、テレビなどのメディアを利用して様子を知ろうにもどこか客観的過ぎて現実味を帯びていなく、宙に浮いた風船を見上げているような感覚がして上手く自らに喚起することができなかつた。“想像を絶する”と表現するにふさわしい、本当に私の想像を絶していた。

デリケートであろう彼らに対して細心の注意を払い、彼らとコミュニケーションを取ろう。そう考えて修学旅行に臨むことにした。人間対人間であることには間違いはなく、彼らにとって有意義な時間を一緒に過ごすことのできる存在になることに尽力しようと考えた。

修学旅行当日になり彼らと出会った。彼らの私への歓迎の仕方はとても手厚かつた。名前を聞く前から殴る蹴る・・・有り余るエネルギーを全てここで放出するかのようだった。歓迎なんてしようと考えていなく、目の前にいる私という人間がどのような人間なのか窺うためのボクシングで言うとジャブのような様子を見られているような感覚も

あつた。校長先生から「子供たちは大人なんて信用していない。初めは殴られたり蹴られたりはすると思うよ。」と聞かされていたが、まさにその通りで事前に聞かされていた内容をそのまま形にして表された。「裏で校長先生が操っているのでは・・・。」なんて思ってしまいそうな程に予想が的中した。

私は彼らとのコミュニケーション法を当初考えていたやり方を少し変えてダイナミックにしてみようと考えた。デリケートな細心の注意が必要なものに手を触れるように接する要素も残し、かつ彼らのエネルギーに此方が負けてしまわないように、目には目をというように明るく元気よく振る舞うことにした。それが彼らの欲するもののような感じがしてそれが功を奏すのかは分からぬままにフィーリングで判断した。

子供たちとの時間を多く取り、コミュニケーションを取っていく中で彼らは最初から最後まで殴る蹴るなどの行為を続けた。私はそれを彼らの自己表現方法の一つとして捉え、受け入れた。もっと彼らの自己表現を引き出そうとコミュニケーションを図った。その結果彼らはまるで自分たちの兄貴分のように位置してくれた。攻撃的な言動や行為を私に行いながらも私の横や後を付いてくる彼らは愛おしくも感じた。そして自らの3・11のデリケートな内容のことやその後の自分のことなども語ってくれた。素直に嬉しかった。

ここで終わればプラスな内容で締めくくれるかもしれない。彼らの中に私という存在が肯定的に位置しただろうと考える。その中でここで終わってしまうのではやりっぱなしであり、私の自己満足でしかない。この経験をどのように次の自らの行動に繋げることができるか、彼らの将来に対してどのように力になることができるのか、考えることができなければならない。軽はずみな言動や行動は差支えたいと思うが、彼らのために何か、という考えが身についた。私の中に課題意識が芽生えたことが今回の修学旅行で得た何よりの事柄だと考える。

(高柳恭介 引地台中学校教諭)

■修学旅行にご協力いただいた皆さま■

□付添スタッフ(22名)□ 柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、松永雅文(大和市特別支援教室)、苅谷夏子、今井美里・大林沙紀・甘利悠貴・谷口友梨・古浦新司(東京理科大学学生)、山本遼(東京大学院生)、福島良彦(引地台中学校)、高柳恭介(引地台中学校)、下新原なつみ(大野原小学校)、清水いく江、増山博丈(大和市役所)、内藤順子(大野原小学校)、今井哲郎(若草小学校)今井美津子(長坂小学校)

□修学旅行限定支援金□ アスクルエージェント会、東京理科大学理工学部教員有志、清水寛(屋代高校)、清水麻美(長野西高校中条分校)、浅沼蓉子(Ed.ベンチャー代表)、岸岡真人(神奈川県商業流通課)、佐藤彰男(群馬中小企業家同好会)、苅谷夏子、今井美津子(北杜市立長坂小学校)、清水いく江、内藤順子(大野原小学校)、柿本隆夫(引地台中学校)、清水睦美(東京理科大学)

□東日本震災支援通信をご覧になっていた公益社団法人日本フィランソロピー協会より、万石浦支援にかかわる寄付の打診があり、支援金 200 万の寄付が決定しました。

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

